

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12967

研究課題名（和文）ゲーテのガイスト概念の究明 霧囲気思想史のために

研究課題名（英文）Goethe's Concept of Geist. A Historical Investigation for Atmospheric Studies.

研究代表者

久山 雄甫（Hisayama, Yuho）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70723378

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本科研では、ゲーテの『メルヒェン』、『色彩論』、『西東詩集』、『ファウスト第二部』などを取り上げ、それらにみられる霧囲気の描写、および霧囲気的な意味でのガイスト概念の用法を検討した。また、トロクスラーやアレクサンダー・フォン・フンボルトらゲーテの同時代人におけるガイスト概念も、ゲーテとの比較項として考察した。その結果、ゲーテのガイスト概念の多義性のうち、特に（1）「時間論的・生命史的な含意」および（2）「新現象学における霧囲気概念への接続可能性」を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ゲーテのガイスト概念については世界的にも先行研究が少なく、本科研の成果をなす日英独語での論文および口頭発表は好意的な反響を得た。なお、これら諸概念と東アジア思想史における「気」概念との類似性についても、本科研では今後の研究の種を蒔くことができた。また本科研をひとつの基盤として創出された新学術領域「霧囲気学」は、思想史研究を分野横断的に展開させるプラットフォームとなるべきものであり、本科研の後継課題では、ゲーテのテキストに含まれていた霧囲気をめぐる知見の萌芽を、倫理学、芸術学、地理学などの諸分野との協働により、社会実装をも視野に入れた現代的視点から開花させたい。

研究成果の概要（英文）：In this KAKEN project, I studied Goethe's several works such as his Maerchen, Colour Theory, West-Eastern Divan and Faust II in order to examine their literal/scientific depictions of atmosphere as well as the use of the concept of Geist in the sense of atmosphere. Considered was also the concept of Geist in Goethe's contemporaries such as I. P. V. Troxler and Alexander von Humboldt for a comparative research. As a result, it was possible to elucidate the polysemy of Goethe's concept of Geist, particularly (1) its temporal (life-historical) implications and (2) its possible relationships to the (neo)phenomenological concept of atmosphere.

研究分野：文学、思想史、霧囲気学

キーワード：ゲーテ ガイスト 霧囲気

## 1. 研究開始当初の背景

本科研の背景をなしていたのは「雰囲気思想史」研究が必要であるという考えであった。自然の崇高さにせよ、変動する社会の空気にせよ、あるいは家庭や故郷の安らぎにせよ、人間はつねに雰囲気のなかで生きており、しかもそこに生の基盤を感じ取ることも少なくない。それゆえ雰囲気をめぐる思考は、人文学の諸分野できわめて重要な役割を果たしうると久山は考えてきた。雰囲気というテーマは、哲学（主に現象学）において、ハイデガー、ボルノウ、テレンバツハ、バシュラールらが限定的な視角から話題にしてきており、ヘルマン・シュミッツが創始した「新現象学」のアプローチ（1970年代）によって本格的に哲学的な基礎づけを得た。シュミッツの雰囲気論は、ゲルノット・ペーメによる拡張を経て、20世紀末から今日にかけて、あたかも堰を切ったかのように環境倫理学、技術哲学（AIやVR）、人間関係論、精神医学、群集心理学、マーケティング論、都市デザイン、建築学、文化比較論など多岐にわたる分野で注目されつつある。しかしながら雰囲気というテーマに対する思想史研究からのアプローチは、いまだ不十分である。雰囲気は、さまざまな時代と地域における人間の自己理解および世界理解に応じて、いかに捉えられてきたのか。これについての（地域と時代をまたぐ）一般性と（地域と時代で異なる）特殊性を探る作業は、雰囲気というテーマが人文学に根付こうとしている今日、その現代的応用の基盤を固めるためにも、ますます必要性を増している。こうした考えから、本科研ではゲーテにおけるガイスト概念を中心に、「雰囲気思想史」研究を進めることにした。

## 2. 研究の目的

近代ドイツ思想史におけるガイスト概念の多義性を解明することで、「雰囲気思想史」において中心的に検討されるべき問題系に光を当てるのが、本科研の大きな目的であった。

ドイツ語の「ガイスト (Geist)」概念は非常に多義的であり、日本語では、「精神」や「霊」のほか「精気」「才気」「雰囲気」「酒精」などに翻訳されうる。近代ドイツ語圏では、古代ギリシア語のプネウマやラテン語のスピリトゥスの訳語としても使われ、もともとのゲルマン語における「驚愕（させる霊的存在）」の意味とともに、「風」や「息吹」の原義に由来する雰囲気のイメージを内包してきた。ゆえに「ガイスト」は文脈によって、主体の内面に位置づけられる「精神」でもあれば、その主体の周囲に茫洋と漂う超個的な「雰囲気」でもありうるという、曖昧で難解なありかたをみせる（なお「霊」の意味は往々にして「精神」と「雰囲気」の中間に位置づけうる）。雰囲気を思想的テーマとして考察する際には、複数の二元論（主体と客体、非物体と物体、実在と非在、個人と共同体）の克服が問題となるが、それらの区分別の意味をも内包しうる点で、ガイスト概念の重要性は際立っている。

なかでも、現象そのものの「繊細な経験」を重視したゲーテは、いわゆる近代的な世界観（主客分離、科学の客観主義、心身二元論など）に疑いの目を向け、そこから現代思想にも接続しうる思考を展開した点で、「雰囲気思想史」を構想する際に最も注目に値する一人である。ただし彼は「ガイスト」の語を（ヘルダーやヘーゲルのように）哲学思想の鍵概念にしたわけでもなければ（ノヴァーリスやヘルダリンのように）重要な文脈でたびたび召喚したわけでもない。このことが先行研究の盲点を生み出してきた。思想史や文学史におけるガイスト概念の変遷を扱った先行研究は共通して、多少なりともゲーテに言及こそすれ、思想的観点からの考察には踏み込んでいない。一九世紀からの膨大な積み重ねを誇るゲーテ研究だが、そもそもゲーテにおけるガイスト概念を扱った先行研究からして僅かであり、モノグラフは存在しない（信頼できる Helmut Koopmann: Art. „Geist“ in Goethe-Handbuch. Bd. 4/1, Sonderausgabe, Stuttgart und Weimar 2004, S. 346-348 の文献書誌にもモノグラフは挙がっておらず、これ以降も管見のかぎり特筆すべき研究は出ていない）。しかし本科研までの久山の研究によれば、ゲーテ作品において、ガイスト概念の多様な語義が保存・活用されており、先述した二元論（主体と客体、非物体と物体、実在と非在、個人と共同体）を現代的視点から捉えなおすための視座が見出せることが見込まれた。具体的には(A)久山によるゲーテのガイスト概念に関する研究を発展的に継続することと(B)その成果をこれまでの成果とあわせて書籍化するための総合的視点を獲得することを目的とした。

## 3. 研究の方法

いま本研究の目的を(A)これまでのゲーテ研究の発展的継続と(B)総合的視点の獲得に分けた。第一の(A)については、文献学的方法で研究を進めた。具体的には、特にゲーテの形態学論文、『メルヒェン』、『西東詩集』、思想詩『一と全』、遺作『ファウスト第二部』をとりあげ、さまざまなヴァリエーションを含めた原文、成立史、先行研究史などを勘案し、ゲーテ作品にみられるガイスト概念の用法を特に「雰囲気」との関わりから考察した。

第二の(B)については、ガイスト概念と雰囲気概念を軸に、ゲーテ思想と新現象学の接続を

試み、これによって総合的視点を得ようと試みた。ヘルマン・シュミッツおよびゲルノート・ベームのゲーテ論を手がかりとして、新現象学の哲学的叙述において現象経験の実例として用いられているゲーテ作品からの引用を精査し、シュミッツとベームによる新現象学的雰囲気概念形成においてゲーテが演じた役割を考察した。

#### 4. 研究成果

2019年度は、第一に、ゲーテ晩年の思想詩に見られる「世界ガイスト(Weltgeist)」と「世界魂(Weltseele)」の語について研究を行い、2017年6月にヴァイマル・ゲーテ協会で行った発表を論文化した。この中で、これら二つの言葉は何らかの意味を指し示しておらず、むしろ「言わなかったこと(das Ungesagte)」としての空所になっているという解釈を提示したが、これは詩における雰囲気の表現の一方法と位置づけることができる。

第二に、『ファウスト第二部』に登場する人造人間ホムンクルスについての文献を調査・考察した。ホムンクルスは身体をもたないガイストのみの存在であって、身体を得ようと太古のエーゲ海に飛び込んで悠久の生命史をたどりなおす。この場面を独自の視点から再検討し、ホムンクルス劇の全体を「ガイストの脱中心化」を描く文学として読み解いた。さらにそこから、ゲーテ晩年の作品では主体としてのガイストそのものではなく、むしろガイストを取り巻く環世界が重視されている可能性を見出し、雰囲気概念との接続を試みた。

第三に、ゲーテと自然哲学者トロクスラーの関係を整理した。ゲーテの形態学論文には、トロクスラー『人間の本質を見る眼差し』から非感性的なガイスト概念にまつわるテーゼが引用されているが、その位置づけはきわめてアンビバレントである。ゲーテ形態学がトロクスラーの神秘的な自然哲学を、一方では批判しつつ、他方では巧みに利用していた可能性を指摘し、ガイストの非感性的把握と雰囲気の感性的知覚の関係について考察を進めた。

第四に、ゲーテの地学研究に見られる時間感覚について「世界の時間化」との関連を探った。ヒューマン・スケールを超えた時間感覚の意義を解明する手がかりが得られ、これを土台として雰囲気における時間性的問題に取り組んだ。

2020年度は新型コロナウイルスによる感染症の感染拡大のため、大幅な研究計画の変更を強いられた。年度前半に予定されていたコロムビア大学(アメリカ)での研究滞在は不可となり、また夏の国際独文学会パレルモ大会も延期となった。このため神戸にとどまり、本科研の内容を含め、これまでの研究成果の総まとめをすることにした。その成果が長尺の論文「ゲーテにおけるガイスト概念——永遠、時間、メタモルフォーゼ」であり、この論文によって2021年3月に京都大学博士(人間・環境学)の学位を得た。この博士論文執筆によって、本科研の当初の計画にはなかった新しい見通しが得られた。昨年度から考察してきた「生命史」と「余白」の概念をより丹念に検討することで、雰囲気における時間性と空間性の不可分性について考察を進めた。また、ゲーテ思想との比較対照のために、アレクサンダー・フォン・フンボルトの著『コスモス』におけるガイスト概念研究にも取り組んだ。

2021年度には、オンラインを中心に、新型コロナウイルス感染症によって遅滞していた研究状況が一転して動き始めた。国内外の研究者との学術交流が再び活発化し、延期されていた国際独文学会パレルモ大会での口頭発表(ゲーテの『メルヒェン』論)もオンラインで行われた。これは高い評価をえて国際論文集掲載の依頼があったため、発表内容を論文化した(2022年度刊行)。ただしパレルモ出張と同時に予定していたトリノ大学やローマ第二大学の研究者との面会・ワークショップは中止となった。

国内では、産総研で「ゲーテと化学」についての招待講演を行ったほか、一般雑誌『未来哲学』にはホムンクルス論を寄稿するなど、本科研の研究成果をひろく学際的・社会的に提示し検討する機会に恵まれた。また阪神ドイツ文学会シンポジウムとして「ブネウマ、スピリトゥス、ガイスト——概念史点描の試み」をオンライン企画・開催し、本科研の成果を発表した。また、これらと並行して、アレクサンダー・フォン・フンボルト『コスモス』におけるガイスト概念研究にも継続的に取り組み、ゲーテとフンボルトの比較を行う論考を執筆した。年度末には、本科研の成果をひとつの基盤として、神戸大学大学院人文学研究科を中心に、新学術領域「雰囲気学」創設のための若手研究者チームを立ち上げた。

2022年度も引き続き新型コロナウイルスによる影響に対応しつつ大幅な計画変更のもと研究を遂行した。昨年度の準備を踏まえ、神戸雰囲気学研究所(KOIAS)を神戸大学大学院人文学研究科内に正式に設立した。多分野の研究者の協働によって新学術領域である雰囲気学を樹立するための組織であり、島津製作所との産学連携も開始した(2023年度より)。

ゲーテのガイスト概念については引き続きゲーテの文学作品(特に『ファウスト第二部』)と自然科学論文(特に形態学)を中心に検討を行った。その結果、ゲーテが精神や霊という訳語があてられるガイスト概念を雰囲気的な現象としても捉えていたことが確認できた。

なお本科研課題の土台となる雰囲気論を樹立したゲルノート・ベーム氏の逝去に伴ない、2023年1月にはドイツ・ダルムシュタットにて氏の追悼シンポジウムが開催された。本科研による成果を生かして「ゲーテと雰囲気現象学」というタイトルの発表を行い、大きな反響を得た(ド

イツ語論文として2024年度に刊行予定、収録決定済)。このシンポジウムを機縁として、上記の神戸雰囲気学研究所において、ダルムシュタット哲学実践研究所をはじめとしたドイツの各大学・学術機関との関係強化が実現した。

最終年度の2023年度は、ガイスト概念にみられる「雰囲気」さらには「息吹」の含意から出発し、本科研課題のさらなる展開可能性を探る一年になった。2023年6月にはスロベニアでの国際シンポジウムで、ゲーテ『西東詩集』にみられる息吹の両極性イメージを扱う口頭発表を行った。2024年9月(神戸大学)同年11月(ドイツ・ハンブルク高等研究所)2024年3月(慶應義塾大学)には、ゲーテと雰囲気学の関連についての口頭発表を行い、それぞれ『色彩論』・ゲーテ晩年の無題詩(「黄昏」)・『ファウスト』第一部を取り上げつつ、ゲルノート・ベームのゲーテ受容を中心に考察を行った。また、2023年5月にも、本科研課題に関わる雰囲気学の口頭発表をドイツ・キールで行った。2023年12月には『現代思想』で論考「雰囲気学をひらく」を发表し、本科研の成果を含め、「雰囲気学」の先駆者としてゲーテを大きく取り上げた。2023年12月から翌年2月にかけてはローマ・トル・ウェルガータ大学のトニーノ・グリッフェッロ教授を客員教授として招聘し、綿密な共同研究を行った。2024年3月には、プネウマ/スリピトゥス/ガイスト概念と類似する、東アジア思想史における「気/氣/氣」概念に関して、台湾の中央研究院と共同シンポジウムを開催した。

研究期間の全体を通じて、ゲーテのガイスト概念の多義性のうち、特に(1)「時間論的・生命史的な含意」および(2)「新現象学における雰囲気概念への接続可能性」を集中的に解明することができた。双方とも従来の研究にはなかった新視点であり、今後の研究推進において一定の意義をもつと考える。東アジアの「気」概念などと比較考察することで、本科研を出発点とする哲学史・文学史的研究内容をさらに分野横断的に展開させていきたいと考えている。具体的には、(1)「時間論的・生命史的な含意」については、科研・基盤C「ゲーテ形態学的生命論の研究(23K00428)」を後継プロジェクトとしてゲーテ研究の国際展開を計画している。また(2)「哲学的雰囲気概念への接続可能性」に関する本科研の成果は、新学術領域「雰囲気学」の創出と展開につながっており、今後は、神戸大学と島津製作所の共同事業、科研・基盤B「感情と空間をめぐる比較文化史——新現象学の「感情空間」概念の批判的再検討(23H00574)」および神戸大学の先端的異分野共創研究プロジェクトとして研究を推進していく。またこれと同時に雰囲気学の文脈における独自のゲーテ研究も推進し、上記の(1)と(2)を総合して、ガイスト概念を中心に再解釈されたゲーテ思想を「雰囲気学」の先駆として位置づけることが、本科研の後を継ぐ今後の研究の目標となる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 3件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yuho Hisayama	4. 巻 4
2. 論文標題 Zum Alchemistischen und Italienischen in Goethes Maerchen	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive. Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik.	6. 最初と最後の頁 389-395
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 久山雄甫	4. 巻 3
2. 論文標題 ホムンクルスと海 ゲーテ『ファウスト第二部』の余白	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 未来哲学	6. 最初と最後の頁 221-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ゲルノート・ペーメ（翻訳：久山雄甫）	4. 巻 43
2. 論文標題 ゲーテは今日のわたしたちに何を語るか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モルフォロギア	6. 最初と最後の頁 126-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yuho Hisayama	4. 巻 135
2. 論文標題 Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht Eins und Alles	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Goethe-Jahrbuch 135 (2018)	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-476-02786-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuho Hisayama	4. 巻 10-2
2. 論文標題 Warum Goethe I. P. V. Troxler zitiert: Zum Geist-Begriff im morphologischen Kontext	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Coincidentia. Zeitschrift fuer europaeische Geistesgeschichte	6. 最初と最後の頁 549-561
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 久山雄甫	4. 巻 51 (15)
2. 論文標題 霧田気学をひらく	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 201-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 ヘルマン・シュミッツの感情 = 霧田気論
3. 学会等名 神戸霧田気学研究所第1回月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuho Hisayama
2. 発表標題 Goethe und die Phaenomenologie der Atmosphaere. Farbenlehre, Daemmerung, Margarete
3. 学会等名 ゲルノート・ペーメー周忌記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 アレクサンダー・フォン・フンボルトの自然観相学 霧田気学との関連から
3. 学会等名 科研（基盤B：20H01248）研究会（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 霧田気学をひらく 神戸霧田気学研究所（K0IAS）について
3. 学会等名 島津製作所社内講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuho Hisayama
2. 発表標題 Das Alchemistische und das Italienische in Goethes Maerchen
3. 学会等名 第14回国際独文学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 ゲーテと化学 アルケミア、親和力、ホムンクルス
3. 学会等名 産業技術総合研究所 触媒化学融合研究センター講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 ゲートとガイスト概念 生命、時間、余白
3. 学会等名 阪神ドイツ文学会シンポジウム「 pneuma、spiritus、ghost 概念史点描の試み」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける思弁と経験
3. 学会等名 リアリズム文学研究会シンポジウム「旅するリアリズム 近代文学における外部世界との接触」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 ゲートとアルケミア
3. 学会等名 第8回化学フロンティア研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久山雄甫
2. 発表標題 ホムンクルスと歴史
3. 学会等名 ゲート自然科学の集い京都例会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Yuho Hisayama
2. 発表標題 Abbild und Einbildungskraft in Goethes Morphologie am Beispiel seines Faultier-Aufsatzes
3. 学会等名 Internationales Symposium zur interdisziplinären Bildforschung (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuho Hisayama
2. 発表標題 Weltliteratur heute: Goethe zwischen Deutschland und Japan
3. 学会等名 Vortrag der Goethe-Gesellschaft in Darmstadt (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Ute Gahlings (Hg.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Verlag 23	5. 総ページ数 222
3. 書名 nicht allein mit dem Kopf. Perspektiven auf Hermann Keyserling. (担当箇所: Yuho Hisayama: Denker sein und Augenmensch. Anklaenge an Goethe im Japan-Kapitel des Reisetagebuchs)	

1. 著者名 Thomas Brook and Kantaro Ohashi (eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 神戸大学出版会	5. 総ページ数 230
3. 書名 Adaptation, Mediation and Communication of Otherness in a Globalizing World. (担当箇所: Yuho Hisayama: World Literature Today? Reconsidering Goethe's Idea and its Critical Potential.)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸雰囲気学研究所 (KOIAS)  
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/koiias/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------